



## 年間第 8 主日 (マタイ 6:24-34)

あなたは、神と富とに仕えることはできない

長崎教区にとって、また個人的には中田神父にとって恩人である道向 栄神父さまが 2 月 26 日肺炎で亡くなりました。87 歳でした。今週の福音朗読と重ね合わせながら、今日は恩人の神父さまを偲びたいと思います。

郷里の鯛ノ浦教会に残されている台帳を調べると、わたしに洗礼を授けてくれたのは山内 豊神父さまでした。けれども、わたしの記憶の中には、山内神父さまのことは何もなくて、小さい頃の神父さまというとやはりこの亡くなられた道向神父さまということになります。

神父さまは鯛ノ浦にいたときは病院に通院するというので海上タクシーで若松に渡っていました。その時わたしも海上タクシーに乗せてもらったりした覚えがあります。

また侍者は、クリスマスにご褒美で 5 百円札をもらっていました。結婚式の侍者や葬式の侍者のときにも特別手当で 5 百円札をもらっていたと思います。そうやって機会があれば呼び出されて手伝いをしていたおかげで、神父さまという生き方に親しく触れることができました。

6 年生の時、2 通りの神学生の募集が回ってきました。1 つは、当時大分教区の司教さまだった平山司教さまが、上五島と下五島をくまなく回って募集していました。司教さまなんて滅多にお目にかかることはないわけで、「あなたもうちの神学生になりませんか」と、指輪をはめて赤い帽子と赤い帯をした立派な身なりをした人から誘われたものから、「いいなあ」と一瞬思いました。

そこへ道向神父さまが割って入りまして、「ダメダメ。この子は長崎教区の神学生にやるとやけん」と言っておられたのを覚えています。道向神父さまの賢明な判断があったと感じています。

その後、教区の神学校の校長先生が募集においでになり、当時の校長であった浜崎 渡神父さまから「ぜひ神学校においでなさい。これを学用品の足しにしなさい」と言われて、ここでも 5 百円札を受け取りました。最終的にこの 5 百円札が決め手となり、神学校に入学したのでした。

神学校に入学してからも、休暇に入ると司祭館に真っ先に挨拶に行き、休暇中は何があっても毎日ミサに行って、聖書朗読やそのほかの典礼の手伝いをさせられました。信心業についてはことさら厳しい神父さまでしたので、神学校にいるときよりも、休暇中に道向神父さまにしごかれるほうがきつかったかも知れません。

そうやって召し出しの最初の時期を過ごしましたが、道向神父さまはわたしが高校生になった年に、佐世保の鹿子前教会に転勤していきました。すると鯛ノ浦の神学生は長崎から佐世保経由で鹿子前に立ち寄ってから休暇に入るようになりました。さらに大神学院の神学生になっても、道向神父さまの導きをもらいながら育ったと言ってもよいと思います。その中に、今日の福音に繋がるさまざまなお話をいただきました。

たくさん学ばせていただきましたが、それはもしかしたら、「よく考えたら」という条件付きだったかも知れません。わたしが見た範囲で、道向神父さまが乗っていた車は晩年を除いてはマーク two でした。コマーシャルではないですが、「いつかはマーク two」と思ったものでした。

行った先行った先で司祭館を作り替えました。場合によっては教会とどっちが大きいかなあという司祭館に見えました。神学生は来客用の応接間ではなく、執務室に通されましたが、そのときどきの最新の家電がずらっと並び、圧倒されました。

ただ一方では、信心をおろそかにすることは決してありませんでした。その姿を見ながら、「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」(6・24) というみことばをしみじみ考えることになりました。

神学生として教会の手伝いを丸一日すれば、その間に司祭館で食事もいただくこともありました。司祭館の食事は、目を見張る内容で、「こんなの食べたことないなあ」と思いながら出されたものをほおぼりました。後で考えてみると、鯛ノ浦の時代から足が痛いと言っていたのですが、痛風の症状があったのかも知れません。

食事をいただくたびに驚きの連続でしたが、「自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。」(6・25) というみことばは、わたしにとってはどこか遠い場所で起こっているのではなくて、すぐ目の前で起こっていることでした。

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(6・33) このみことばで道向神父さまのことが偲ばれるのは、常に赴任した教会で信徒の動きを把握していたということです。当時パソコンもワープロもなかった時代に、ガリ版印刷で教会の全世帯の記録を印刷したものを資料として用意してわたしたちに見せてくれていました。どんなに小さな出来事でも、その資料を見れば一目瞭然でした。

神の国がどのようにこの小教区で根付き、育っていくのか。それぞれの信徒がどのような霊的状态にあって、どんなお世話を必要としているのか。いつも綿密に調べ上げて資料に残していました。大変に筆まめで、どんなことにも必ず返事をくださり、それはもうまねのできない細やかさでした。結論としては、すべてが神さまから与えられ、すべてを神さまに委ねていけばよいと、心から信じている神父さまでした。

「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」(6・34) 道向神父さま、ゆっくりお休みください。明日の長崎教区のこと、明日を担う世代が思い悩み、悩み抜いて舵を切ります。神父さまの今日までの苦労は、十分神さまに知られています。どうか、鯛ノ浦から送り出した出来の悪い後輩司祭のために、神さまに取り次ぎをお願いします。